

1 多様なアプローチ（きっかけづくり）による里地里山の再評価と協働による取組の進展

①身近な環境に生息する希少種の発見、いきもの調査、外来種駆除等の取組みを通じて、里地里山の意義の再評価と保全再生の取り組みにつなげた例

福井：地域住民主体のアベサンショウウオの調査・保全活動

越前市では、各集落から1名以上が研修をうけて「希少野生生物保全指導員」となり各集落周辺のアベサンショウウオ等希少野生生物の調査・保全活動を行っている。

指導員は、地区内の生き物調査や外来種駆除活動、ビオトープ整備作業を、集落の取り組みとして、集落ぐるみの活動を創出している。生物調査の指導は、各集落の希少野生生物保全指導員のほか、市の希少野生生物保護専門員、福井県自然保護課および福井県自然保護センター、及び関連機関の職員があたり、住民が捕獲した生き物の同定やその生息環境などについてその場で解説したりしている。

調査場所は、集落内の谷津田や裏山など身近な場所で、地権者を含む地元住民らが主体となり専門家とともに調査することで、今まで見過ごしてきた場所に、希少両生類であるアベサンショウウオが生息していることや、メダカやゲンゴロウなどのかつては「身近な生き物」が、今では希少種になっていることに住民みずからが気づき、身近な里地里山の再評価につながっている。

このようなことの積み重ねによって、荒廃した谷津の保全再生や、生態系を脅かす外来種の駆除等に、検討段階から、住民が主体的・積極的に関わるようになってきている。



山際の水辺を調査・整備しアベサンショウウオの生息地を保全する



生物調査



集落内の休耕田を再生